



古典的な陶器の美しさのひとつに灰釉があります。藁、松、イス、栗皮、ナラなど、それぞれ独特の風合いの釉になります。

天然の灰はそのまま使用しても美しい灰釉になりません。灰釉を作る上で大切な、灰のあく抜きの行程を説明します。木灰には、石、砂、土などが全体の6～7割混ざっています。また水溶性のアルカリも含まれます。釉薬で使う石灰分を漉取り、水溶性のアルカリを洗い取ることを、陶芸では灰のあく抜きと言います。



灰と水をかき混ぜ、上澄みの灰汁を別のバケツに、ゴミよけのフルイを通して移す。元のバケツの水が透き通るまで水を入れ上澄みを移す。



元のバケツに残った砂は捨てる。灰が沈殿するのを待ち、上水を捨てる。20回ぐらい繰り返す。



布を敷いた箆にあけ、乾燥させる。

※昔、染め物の紺屋は、灰の上澄みを媒染として使っていました。残った灰は焼物屋が紺屋から買います。

つまり、水溶性のアルカリは紺屋で、不溶性のアルカリを、焼物屋で使っていたわけですね。